昭和二七年一二月一日　第三種郵便物認可
昭和二四年六月一三日国有鉄道特別承認雑誌第一一九九号

經濟論叢

第102巻　第5号

マルクス生誕150年記念号

生産力と生産関係との論理的な関係 ……出口勇蔵 1
経済学批判体系と世界市場恐慌 ……松井清 33
マルクスにおける「国家と経済」……島恭彦・池上惇 60
19世紀中葉における資本の直接的生産過程 ……坂本和一 96
思い出すままに ……福井孝治 125
マルクスの書簡について ……編集委員会 128
トリールのマルクス生誕記念祭記事 ……編集委員会 131
京都大学経済学部所蔵マルクス・エンゲルス著作（1845—1894）目録 ……経済学部調査資料室編 134
マルクス「資本論」100年・マルクス生誕150年記念論文・記事目録

昭和43年11月

京都大學經濟學會

思い出すままに

福井孝治

私がマルクスの筆跡を手に入れたのは，全く偶然のチャンスによってであって，顧みるともう四十余年も昔のことである。

私は大正12年（1923年）春から約20ケ月くらいの間ドイツに留学していたが，ベルサイユ条約による賠償の重圧にドイツ経済がうめていた時代であって，フランス軍によるルール地方の占領，史上未曾有ともいうべきインフレーションなどがあって，何となく物情騒然たる空気がただよっていた，— もっともインフレーションは私の到着後半年くらいしてレンテンマルクの発行によって終息したが，——労働者のストライキも幾度も起った。電燈がつかずベルリンの街が暗黒になったり，一部の日本人などはパンを買いこんで万一の場合に備えたりしたこともあった。ミュンヘンでヒトラーがルーデンドルフと組んで一揆を起したのもその年すなわち1923年の11月のことであった。

その頃私たちがしばしば訪れた本屋の一つにベルリン，アウグスブルク街のフーゴー・シュトライザントという古本屋があった。今日ではマルクスやエンゲルスのものなど，完全な全集ではないにしても東独から著作集が出ており，特別の場合を除きこれで充分間に合う状態であるが，当時はそうでなかった。少し丹念に集めようと思えば，どうしても古本屋に頼るより仕方がなかった。シュトライザントは，そうしたものを比較的よく集めてくれた。店主自身も自分の私蔵本としてアナーキズム関係の珍らしい本を持っていた。その方面に興味を持っていた亡友岩城忠一君が，ゾコリ（？）の著書を借り出して（或は譲り受けたのかも知れない）うれしそうにページを繰っていた姿が昨日の事のように浮んで来る。店主自身の語ったところによると，マルクス・エンゲルス研究所の初代所長であったリャザノフなども，しばしばここを訪れたようである。日本

人では櫛田民蔵氏のことをよく知っていた。大原社会問題研究所所蔵のマル・エン関係の珍らしい文献の多くは，恐らくこのシュトライザントの手を通して集められたものではなかろうか。私と同じ頃の留学生では，実際に顔を合せたのは両三度にすぎなかったけれども，向坂逸郎氏などがここのよい顧客であったようである。

私は下宿も比較的近かったので，特別に用事はなくても食後の散歩などのついでにしばしばこの書店に立ちよった。自然，店主とも親しく話をするようになり，社会民主党の大会に入場券を世話してもらって傍聴したこともあった。付け加えておくが，次第に勢力が弱まりつつあったとはいえ，当時はまだ社会民主党が第一党の時代であり，ごく短期間ではあったけれども「金融資本論」で有名なヒルファーディングが，大蔵大臣になったこともあった。

そんなある日私がぶらりとシュトライザントに立ちよったところ，店主が珍らしいものがあるといって奥から持ち出して見せてくれたのが，あの独特の書体で一見してそれとわかるマルクスの手紙及びこれと対照的な達筆なエンゲルスの手紙であった。私は即座に譲ってもらうことにした。代価はいくらであったか忘れてしまったが，マルク貨でなくてポンド貨で支払ったことは確かである。しかし，われわれ日本人の感覚からいうと意外に安かったことを憶えている。一体，ドイツ人はこうした筆跡を尊重しないのであろうか，いや，われわれ日本人の奇妙な骨董癖の方が正常でないのかも知れない，こんなことを思ったほどである。どうして手に入れたのか尋ねたが詳しくは教えてくれなかった。

この手紙を入手した時から私の頭には河上先生のことが頭に浮んでいた。大正14年春帰朝し先生のところへ挨拶に伺った時，最上のおみやげだと思ってこの手紙を持って行った。ところが先生は，個人で私有するのは惜しい，どこか適当な所へ収めた方がよい。別に急ぐことはないからそれまでは持っていよ，とのことで受け取られなかった。それから2・3ヶ月立って河上先生から，大原か京大へ収めたらどうであろうか，大原では相当な価格で買いとってもよい

ような意向である，という便りがあった。これに対して私は自分の母校である京大へ寄贈するすることにしたい旨書き送り，改めて先生のもとへ手紙を持参したのである。

マルクス・エンゲルスの手紙が京大へ収まるまでのいきさつは以上の如くである。後ちになって，これも河上先生からの便りによってであるが，大原研究所の手を通してマルクス・エンゲルス研究所にこの手紙の複写を送り，リャザノフから礼状がとどいたということを知った。

Hotel du [illegible] Lausanne
24 August 82

Dear [redacted]

yesterday we [illegible] nach Lausanne, Rogers in relation, [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [redacted] Carlsruhe
in Lausanne. [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible].
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] ? [illegible]: [illegible]
[illegible] and [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]. [illegible]!
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible], [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [redacted] nach
Lausanne, [illegible] [illegible]. [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] für jeden Fall [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] Charles [illegible], [illegible] Karl [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible], sobald [illegible]
[illegible] wieder [illegible].

京都大学経済学部所蔵 （第十六）

[illegible]

Hôtel du Nord. Lausanne
24. August 82

Dear [Fred],

Gestern, von Dijon nach Lausanne, Regen und relative Kälte. Im Regen abends 9 Uhr Ankunft zu Lausanne. Meine erste Frage an den Kellner: Seit wann regnet es hier? Antwort: Seit 2 Tagen erst Regenwetter (also seit Tag meiner Abreise von Paris). C'est drôle!

Wir sehn uns heute Vevey, Montreux etc. an, um Sitz zu suchen. *Unterdes* schreibe nach Lausanne, *poste restante*. Es ist mir lieb, zeitig noch einige additionelle Munition zu erhalten, um für jeden Fall nach jeder Seite hin stets disponible. Adresse Dr. Charles Marx, nicht Karl Marx.

Longuet blieb sich bis zum Tag meiner Abreise gleich. Nämlich der Übersetzer des „Capital", der arme Teufel Roy, hatte während meines früheren zweimaligen Aufenthalts zu Argenteuil stets Longuets Versprechen eines Rendezvous mit mir; jedesmal fand Longuet nicht die gelegne Zeit. Und diesmal, als Longuet mir wieder von Rendezvous für Roy faselte, ließ ich ihm freie Hand dazu während der letzten 4 Wochen. Eh bien! *Erst am Tag meiner Abreise*—wo ich zu packen, Abschiedsbesuch bei Dr. Dourlen zu machen, vieles noch mit Jennychen abzusprechen etc.—reist Longuet, ohne mein Vorwissen, nach Paris, holt den Roy, bringt ihn zum Dejeuner (1 Uhr) nach Argenteuil. Es war ein kalter nordöstlicher Wind, und meine obligate conversation mit poor Roy im Garten zog mir Verkältung zu. Thanks to Longuet!

Apropos. Ein teutscher Korrespondent, der von Paris aus Masse teutscher Bourgeoisblätter versorgt, schrieb mir in hochergebner Ersterbung; seine Ehrlichkeit es für nötig haltend mich zu wissen, daß er nicht Sozialdemokrat sei, noch viel minder Korrespondent für Blätter solcher Farbe; aber in allen Kreisen der deutschen „Gesellschaft" sei man ängstlich, offizielle Nachrichten über meinen Gesundheitszustand; verlangt daher to interview mich zu Argenteuil etc.

Of course, I did not reply to that softsawder penman.

Grüße an alle.

Der *Mohr*

Old Becker und Wróblewski werde ich zu Genf besuchen, sobald der Husten wieder nachläßt.